新村出全集

第一卷

新村出全集

第一巻

筑摩書房

新村出全集第一巻

昭和四十七年四月三十日　第一刷発行
昭和五十二年五月三十日　第二刷発行

著　者　新　村　出
担当編者　泉　井　久　之　助
発行者　井　上　達　三
発行所　筑　摩　書　房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一―九一
電話　東京(四)七六五一(代表)
振替　東京六―四一二三番
印刷　多田印刷株式会社
製本　矢嶋製本株式会社
落丁・乱丁本はお取替いたします

総　序

あるいは私が非常に若いころ、ローマの誰かの作中からふと心にとめたのであつたか、あるいはいつしか自分のうちに何となくできていた句であつたか、それはもう定かではなくなつたが、私の心の一隅にはよほど以前からラテン語で、アルス・アルテ・ケーラートゥル（Ars arte celatur）――藝が藝によつて掩いかくされている――という意味の一句が、その口調のよさのせいもあつて、深く染みついている。作為のあとを残さないほど自然でおだやかな名作を見たとき、おのずからいつも心に浮ぶのはこの一句である。それはギリシャの彫刻を見、建築を眺めた場合にかぎらない。温雅で深みをたたえた名画に触れ文学の名品に接したときも同じである。藝の行ないを藝で消す至藝の作に恵まれたとき、いつもこの一句が自然に心の中を流れている。

重山・新村出先生（一八七六―一九六七年）の書かれたもののすべては、こうした至藝の結晶である。たといそれが純粋に学術的な労作であつても、そこには残された苦心経営のあとがない。ひとは容易に、自然に、おだやかに、そして新鮮な知的興味の喜びをさえ覚えながら、おのずからその内容の深さと広さ、識見の高さと正しさへ導かれることができる。これはかつて先生の著作に親しみ、親しくその講席に列した世のすべての人々が、先生のあの温容とともに、併せて長くなつかしく思い起されることであろう。しかもそこに、深く埋けられた庭石の安定と同時に、洋上にただ一角をあらわす大氷山の厳しさを感じとらなかつた人はないにちがいない。至藝の裏にはたゆまぬ博渉と調査、精密な分析と思索があつたのである。これは長い年月にわたり巨細を書き入れて項目ごとに山積する遺された

その手控の類からも、よく窺うことができる。先生の拮据経営のあとが比較的生のままにあらわれるのは、学生時代にものされた二・三の論文だけである。それらもこの全集に収められて、当時すでに、その博達の容易ならぬものがあつたことを示して、おのずから人を打つものがある。

先生のこうした至藝は、また常に、易経の繫辞にいわゆる開物成務、すなわち開成の熱意によつて支えられていた。温雅の至藝におのずから光彩があつたのはこのためである。その創見と新資料の発掘・解明によつて世を裨益された言語学・国語国文学・日本文化史における諸研究、その新鮮な開拓によつて一世を風靡された南蠻切支丹の歴史的探求、その詳細な考証によつて世を率いられた書誌典籍・史伝考、その醇雅な筆致と澄明の心境によつてひとの心情を洗うの概があつた随筆短歌の類、最後にかの大辞典の拮据完成にいたるまで、すべてを貫くのはこの開発・奉仕の精神であつた。それは先生の学識と心情とを今日において生かすばかりか、将来なお長く人知を拡げ世を温めつつ発展をつづけさせるにちがいない。先生をふかく知るとき、われわれはなお生命の火が燃える無限の坑道がそこにあるのを知ることができる。

「物を開いて世を益し、その功績のゆえにこそ、ながく人の胸臆に、のこつて生きる人々の」とウェルギリウスがそのアエネーイスにおいて歌つた一群に、先生はやはり加えらるべきひとりであろう。この偉人の精神を体してその全集を編むわれわれは、それぞれの専攻と好尚が指向する分野の各巻を分担して、その編纂と解説に遺漏なきを期した。書肆筑摩書房の本全集刊行に対する好意と熱意、配慮と援助はまことに大きく、また稿本の蒐集・整理の全般にわたつてご遺族の方々、ことに令孫徹氏の献身的な努力があつたことに、編纂者一同は併せて深い感謝の念をいだいている。先生を敬し先生を愛する世の読者もまた同じ思いをいだかれるにちがいない。

編纂委員会代表　泉井久之助

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

言語研究篇Ⅰ　目次

東方言語史叢考……5

題言 7

国語及び朝鮮語の数詞について 9　朝鮮司訳院日満蒙語学書断簡解説 27　高橋景保の満洲語学 35　満洲語学史料補遺 52　長崎唐通事の満洲語学 57　本邦満洲語学史料断片（附録）明治以前満洲語学書簡明目録 65　日本語かアイヌ語か 74　蝦夷に関する古歌 85　日本人と南洋—日本語に於ける南方要素管見— 92　田口博士の言語に関する所論を読む 103　田口博士に答へて言語学の立脚地を明にす 114　国語系統の問題 124　言語の比較研究に就きて 133　国語に於ける東国方言の位置 140　東国方言沿革考—国語史上の一疑問—（附録）万葉集東歌研究書目 165　足利時代の言語に就いて 197　語学涓滴 217　方言の調べ方に関する注意 224　総主論二篇 238　一　草野文学士の総主の説に就きて 238　二　総主の説に就きて岡沢氏に質す 240　詞の

八衢百年紀念247　音韻史上より見たる「カ」「クヮ」の混同249　音韻変化作用の消長276　音韻変化の諸原因289　音韻調査報告書に就きて伊沢修二氏に与ふ302　言語教授上声音学の価値305　国語上の規範を論ず（序論）317　国語問題今昔談322　国字の将来330　欧洲に於ける国語競争336　ヤコプ・グリム347　ロイマン教授自叙伝の一節—わが経歴の中より—388　仏国言語学界の近況399

別篇並に単行本未載篇……405

イェスペルセン氏言語進歩論抄407　言語学者イェスペルセンを語る449
イェスペルセン『英語の生長と構造』457
日本音韻研究史459
上古文字論批判563
国語の音調に就いて603
解説……泉井久之助

新村出全集　第一巻　言語研究篇Ⅰ

東方言語史叢考

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

題　言

本書の収むる所は、予が国語の歴史的研究と、国語及び東方諸民族の言語の比較研究とのさゝやかなる業績を主とし、かつ此種の研究についての方法論をはじめ、傍らこのがはの資料の解説と先賢の顕彰とに及べるものなり。就中言語の比較研究の方法に関して著者が批判弁難に力を尽くしゝ所頗る多し。国語の事相に渉りては、殊に音声変化の考証に重きをおき、なほ方言の記載措辞法の説明のほか附するに国字国語の問題に対する一家言と古史談とを以てせり。

それ斯くの如く専ら東方言語の史的論述に関する旧著を集めたるものなりと雖も、遠西言語学上の成果にして以て極東言語の考究に資すべきものは、併せて之を編入せること固より言ふをまたず。遠くはグリムの言語史学、近くはイェスペルセンの言語進歩論、前者は国語史の研究を鼓吹せる点に於て、後者は漢英両語の均等を提唱せる点に於て、予の論述に感化を及ぼしし所少からざりしを覚ゆればなり。(一) なほ、独逸梵語学者の半面、仏国言語学界の一瞥、共にこれ一箇後進学徒を誘掖する所なきにしもあらざりしなり。

かくはいへど、予が斯学に志してより三十年間におけるをりをりの小論著、省みれば多くはこれゲーテのいはゆる「一大懺悔の断片」Bruchstücke einer grossen Confession に過ぎず、文質同じく穉拙を免れざるもの書中頻頻相次げり。

題簽に狩野直喜博士の筆蹟を得たるは、写真を秘閣の稀籍に仰ぎたると共に著者の感佩する所なり。校正につき

ては、岩波書店の水野重麿氏が能く意を致したるを謝す。

昭和二年十一月十日

新村出

（一）これに該当する「イェスペルセン氏言語進歩論抄」はこの『東方言語史叢考』より抜き出して本全集のこの巻四〇七頁以下に収める。（編者）

国語及び朝鮮語の数詞について

一

日韓両語の数詞が相異ることは両語同系論者も一般世人と共に之を認めてゐる所であるが、同系論者のうちにも其先駆たるアストン[1]は日韓両土における数詞の構成は両土の言語が同一祖語より分岐した後に行はれたものであらうと解釈し、金沢博士[2]も此説に従ひつゝ他方には更に一歩を進めて数の根本となる語を比較してその一致した点を挙げられた。但しそこに比較された二三の語は、数の根本となる語といふよりも寧ろ数に関係のある語といふ方が適当であつて、一より十までの基本数詞および計算原理には依然として触れないのである。近時日韓両語の非同系論を唱道された白鳥博士は数詞の相違と計算法の不一致とを高調[3]しこの点を以て異系論の骨子とされたやうに思はれる。前二氏が数詞の不一致を軽視し、両国語は数詞成立以前に分離したもので、現存の数詞は各特殊の発達により出来たものであると切抜けてしまはうとしたのに対して、白鳥氏は数詞の相違を国語系統論上の重要な問題と見做し、之に加ふるに計算理法の背馳を以て同系統には容るべからざる根本的欠陥だと考へられたのである。この論文[3]は我国に於ける比較言語学上の最も注意すべき一篇として予輩の夙に興味を惹いた所であるが、なほ論中多少非難を免れない点もあるやうである。

言語の比較に数詞の対照の重要なることは各派及び一般の言語学者の認むる所である。然しポット Friedr. Au-

gust Pott の如きも、その『数詞論』の増補本[4]（一八六八年刊）の巻頭先づ言語の系統を究むるに数詞の比較の大切なことを説き、但だ稀有ながらも他国語より数詞を借用する例のあることを注意し、又ガベレンツGeorg von der Gabelentz もその『言語学』の第三編「言語系統論」の一節に於て[5]蠻民中時として異民族の数詞を借り用ゐることもあつて学者を迷はすことがあると戒めてをる通り、余りに数詞の異同に拘泥し過ぎることは、失当である。一般の実辞虚辞助辞及び語尾の比較と語詞構成法及び配列法の原則の異同と音声上の特点の対照とのうちで、特別に数詞に重きを置くべき理由はない。即ち語根や語法や語序や語音を精密に比較した上で言語の系統は定むべきもので、これらの諸点の比較研究を綜合すれば、日韓両語の関係は今日の知識では意想外に疎遠であると結論するの外なく、現在の言語系統の立て方を標準とすると、欧米の一般言語学者や欧洲の有識なウラルアルタイ系の言語学者の見解と同じく、予輩も日本語は一派特別の言語と考ふべきであると信ずる。従つて日本語を朝鮮語と厳重な意義で同系だと見做し、或はウラルアルタイ系に編入するは早計の毀りを免れないものと考へる。然しながら予輩は数詞以外にもつと沢山確かな一致点が見出されゝば、数詞の相違も計算法の差別も過当に重きを置くことなく、同系論に与するものである（尚ほ系統論上親近の程度といふ問題と、言語混淆といふ問題とは姑く之を他日に保留する）。

① W. G. Aston: A Comparative Study of the Japanese and Korean Languages J. R. A. S. for G. Br. and Irl. 1879
② 金沢庄三郎氏、「日韓両国語同系論」（「東洋協会調査部学術報告」、明治四十二年）
③ 白鳥庫吉氏、「日韓アイヌ三国語の数詞に就いて」（「史学雑誌」、明治四十二年）
④ F. A. Pott: Die Sprachverschiedenheit in Europa an den Zahlwörtern nachgewiesen sowie die quinäre und vigesimale Zählmethode (1868)
この冊子は著者が一八四七年に著はせる Die quinäre und vigesimale Zählmethode bei Völkern aller Weltheile の増補本なり。
⑤ G. v. d. Gabelentz: Die Sprachwissenschaft, ihre Aufgaben, Methoden und bisherigen Ergebnisse (1901, 2 Aufl.)

二

日本語の数詞に倍数法を以て組立てられた若干の語が存することは、享保中荻生徂徠がその随筆『南留別志』に於て暗示を与へた所によつて後世の国語学者に知られてをる。即ちヒト（一）とフタ（二）・ミ（三）とム（六）・ヨ（四）とヤ（八）の関係に於て、数詞の構成法が倍数法によつてゐること及び更に類推すればイツ（五）とト（十）の間にも同じ関係が存するらしく思はれることは、ひとり明治以降日本の言語学者に認められて来たのみならず西洋の日本語学者及び言語学者にも説かれるやうになつた。本邦数詞の倍進計算法が西洋の一般言語学者に知られたのは、予の調べた限りでは、前記ポットの著『数詞論』の後篇なる「三種の主要なる計算法」Die drei Haupt-zählmethoden（西紀一八六八年、本邦明治元年刊行）中の一節（七一頁）を初めとすると思ふが、後三年西紀一八七一年（明治四年）に至つて彼のガベレンツはラツァルス及びシュタインタール協同編輯の「民族心理学」及び「言語学雑誌」第七編①に於て「日本数詞の特質に就きて」Ueber eine Eigenthümlichkeit des japanischen Zahlworts（一一二頁）と題して、ポットの考を増補したので、西洋での研究は行きづまつてしまつた。アストン及びチャンバレンの両日本語学者に至つてもガベレンツ以上に数詞構成法なり数詞の語源なりを究むることは出来なかつた。

ポットは日本数詞の一と二、三と六、四と八との関係に於て倍加法 Doppelung を認め、なな（七）とここの（九）の両語に於て同音の重複 Reduplication の行はれてゐることを想像し、尚いつ（五）の数に於ても倍加又は重複法 Doppelung を認めんとした。ガベレンツは五と十との関係に於て倍加法を発見して更に一歩を進め、而してこれらの数詞構成法に於ては、日本語はウラルアルタイ系の諸国語と全く別種であることを述べ、且つかゝる構成法は自己の知る限りにては、該系統の言語にも其他如何なる言語にも之を認むることが出来ないと断言してをる。

彼はまた予輩が普通に比較せんとするトゥングース語の nada や満洲語の nadan が日本語の nana（七）と似寄つてゐることをも否定し、他方にはなはここのと共に同音重複 Reduplication であるといふポットの語を疑つた。

斯くの如くガベレンツの方が考察が一段進んではゐるが、予輩は倍加法が日本語以外の言語に全然欠如たると断じた氏の説には服することが出来ぬ。日本語ほど整斉に倍進法が行はれてをる国語はないと云ふならば聞こえるけれども、全然無いといふやうに考へたのは臆断といはなければならぬ。ポットの数詞論中にすら阿弗利加の蠻語のうちに三と六、四と八の関係に於て倍進法を取つてゐるものがあること（四五及四八頁）、また南洋ポリネシアの一島に八を四二と称する方言あること（八八頁）、および匈牙利語の八といふ語の四を示す語を含有するらしいこと（二〇頁）を指摘してゐる。姑くフリードリッヒ・ミューラー Fr. Müller の『言語学大綱』[2]につきて世界諸民族の数詞を対照して見ても、一位の数の計算に倍加法を採る言語が、阿弗利加・亜細亜・亜米利加の未開人種に屢々存することを容易に知ることが出来るのである。例へば南阿のカッファー族の二三の方言が三と六、四と八に、同根語を用ゐ、同じくホッテントット族の一方言に三を nana 六を nani といひ、中阿黒奴の一方言に十を五の二倍と称し wdyetš (5) rou (2) = wtyer, wtyar (10) といふが如く倍進法は阿弗利加の蠻民の間に往々認められる。いはゆる極北人種のうちエニゼイ・オストヤーク族の方言に五と十とに同根の語を用ゐ、ユカギール族の言語に三と六、四と八とが倍加計算法によるが如きも、見逃がすべからざる現象である。因みにいふ、同じく極北人種に属するといはれる北米大陸のエスキモー族の方言にも、三・四・五の数詞を基本として六・八・十の数詞を構成する所の倍加法の存することが、白鳥博士によつて指摘されてをる。[3] 亜米利加の土人間には二と四、三と六、四と八、五と十とに於て、各倍進法を取る方言が割合に多いのを発見する。

馬来語派に属する台湾蕃語にも四と八とが同根語であることは、ミューラーの祖述にも見えまた近くは伊能嘉矩氏の研究[4]によつても窺はれる。広ウラルアルタイ系の言語にてもサモエッド派に属するタウギ Tawgy 方言にて二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com